
宇宙工学的生命維持装置 version 「スキャンダル」

檀 敬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

宇宙工学的生命維持装置

version 「スキャンダル」

【Nコード】

N0831V

【作者名】

檀 敬

【あらすじ】

『宇宙工学的生命維持装置』を開発した「ライナス・ミューラ」を間近で見ていた人物のインタビューを収録したが、それはあまりにもスキャンダルな内容であった。

（前書き）

あの『火星に機を植える男』にプロローグがあった！ 一年余りの時を経て今、公開します！

「それじゃあ、本番に行きまーす。はい、用意！……スタアート！」

スタジオは一瞬だけ無音状態になったが、煌びやかな女性アナウンサーの声がそれを打ち破った。

「今、世界中で一番ホットな話題となっている『宇宙工学的生命維持装置』の理論を提唱されたライナス・ミューラ博士の元夫人、アンドレア・ルーベンスさんをスタジオにお招きしました」

アンドレアは、カメラ視線で軽く会釈をした。

スタジオの中は洒落た応接室に見立てたセットが建てられ、明るいグレーの豪華な革張りのソファセットが置かれて、三人掛けにアンドレア、一人掛けに煌びやかな女性アナウンサーが座っていた。

「ライナス・ミューラ博士との馴れ初めなどを聞きながら、ミューラ博士のことをお聞きしたいと思います。では、馴れ初めからお願います」

少し搭が立った、セレブ風ではないが上品な趣きのアンドレアは、茶色のマーメイドスカートに、白でフリルのたくさん付いたカットソーブラウスを着ていた。

「彼とは二歳違いで、大学時代に付き合い始めました。付き合い始めた時は、彼が大学院一回生で、私が大学三年生だったわ。ごく普通の学生、ごく普通の淡い恋だったけどね。そして私の大学卒業と同時に結婚して、六年前の三十二歳の時に離婚しましたけど」

「結婚生活はどうでしたか？」

「彼は実験で忙しくて、家に帰ったことなんて殆ど無かったわね」

「では、離婚された原因はそれだと」

「いいえ……フツ、それだけじゃないわ」

「いろいろあった、という訳ですね」

アンドレアがそんな話はしたくないといった雰囲気醸し出した

ようで、女性アナウンサーは簡単に話題を切り替えた。

「今、注目されているミューラ博士の『宇宙工学的生命維持装置』ですが、これについてはご存知ですか？」

「ええ、よく知ってるわ」

「それは意外でした」

「私も生物学科を卒業してますから、多少のことは解りますわ。それに、彼がその論文を学会誌に提出したのは五年前のことで、ちょうど離婚して一年ほど経った頃だから、その論文のことはよく憶えているのよ」

「そうでしたか」

「でも、その論文は、学会の誰にも相手にされず、闇に消えたとかかり思っていたの。そしたら、つい先日、環インド洋宇宙開発機構のプレス・リリースで知って、ひどく驚いたわ」

「あ、解説しますと『環インド洋宇宙開発機構』とは、インド洋を囲む国々で構成された宇宙開発機関のことです。ええっと……ああ、そうでした。あの時は、世界中に衝撃が走りましたね」

「ええ、それと同時に非難も、ですけどね」

「確かに。ワールドワイドなマスコミのバッシングはスゴかったですから」

「それもそのはずよ。ライナス・ミューラの『宇宙工学的生命維持装置』は、宇宙船などに搭載する装置の話なんかじゃないの。彼は人間そのものを変えてしまう話、つまり人体改造を提唱していたの」

「へえ、そうなんですか」

アンドレアは（報道の現場にいて、そんなことも知らないのか）という表情で、その女性アナウンサーを睨み付けてから『宇宙工学的生命維持装置』の説明を始めた。

「つまりね、生命維持に不可欠なのは呼吸よね。それは、酸素を供給し二酸化炭素を吸収する葉緑体を含んだもので代用するの。つまり、植物を改変した一種のプラントを全身に隈なく埋め込むのよ」

「はあ……」と、女性アナウンサーは気の無い相槌を打った。

「そして、地球の大気圏外に出るためには宇宙放射線の問題も避けて通れないわ。彼は、金属沈着因子という遺伝子を作り出してプラント化し、表皮にそれを発現させるといふものの」

「はぁ……」と、再び女性アナウンサーは気の無い相槌を打った。

煌びやかな女性アナウンサーが、全く科学の話についていけない様子を察知して、アンドレアが問い掛けた。

「どちらも奇想天外なアイデアだけど、人道的に許されることかしら？」

すると、イッパシのジャーナリストとしての鼻を利かせた女性アナウンサーは、意外で鋭い質問をアンドレアに返した。

「人道的問題といえば、この理論の影には人体実験があると囁かれています、これは本当なんですか、アンドレアさん？」

アンドレアは一瞬、息を押し殺して硬い表情になったが、すぐに優しい表情になった。

「私に対して、その質問で返すなんて、実に素敵よ。そう、あなたの想像は正しいわよ。私は彼の被実験者一号って訳」

煌びやかな女性アナウンサーは、自分が想像していた答えとは、全くかけ離れていたことに驚き、更にその答えが余りにもスキャンダラスだったために、既に口から言葉が出ない状態になっていた。それでもアンドレアは喋り続けた。

「もちろん、それは不完全な『宇宙工学的生命維持装置』だけどね。それでも水の中に三十分程度は潜っていられる。それに日焼けもしないわ。第二段階の放射線保護機構も、多少なりとも機能するから。だけど、金属によってアレルギーが出たし、肝臓と腎臓をやられて今も病院通いよ」

アンドレアは、ひと呼吸おいてから再び喋り出した。

「被害者は私だけだと思っていたけど、そう言ってられないようなのねえ」

女性アナウンサーは、既に声が震えていた。

「や、やっぱり、人体実験があったと……。そ、それで、ミューラ

博士を訴えるとか、そんなお考えは……」

アンドレアは、大声で笑った。

「私に、彼を訴えろって言うの？ ウフフ……冗談は止めて。五年前の彼なら、まだ私の話を聞いてくれたでしょう。でも、今はもうダメ。彼の暴走を誰も止められないわ」

煌びやかな女性アナウンサーは、アンドレアを上目遣いで見て、こつそりとつぶやいた。

「それじゃあ……」

アンドレアは気丈に、そしてにこやかに答えた。

「私のこの身体、不完全で不具合があるけど、これでも結構気に入っているのよ」

煌びやかな女性アナウンサーは、シドロモドロでお辞儀をして話を締め括った。

「そうですか……。今日はインタビューをありがとうございました」シーンと静まり返ったスタジオの中に、ディレクターの声がこだました。

「はい、カート！ お疲れ様でしたー」

二階の調整室で収録風景を眺めていたプロデューサーは、小声でつぶやいた。

「このインタビュー、確かにスクープだけど、絶対に放送なんか出来ねえなあ」

そして、プロデューサーは調整卓に両肘を付いて頭を抱えた。

「モロに圧力が掛かってるもんなあ」

プロデューサーは、アンドレアが映っているモニタを睨んで言った。

（後書き）

えーっと、言い訳を。

この作品は『宇宙工学的生命維持装置』の書き直しであり、『火星に木を植える男』のプロローグです。

昨年の空想科学祭2010で「異議あり！」となり、どうしても空想科学祭に参加したかったので、このプロローグを外しての参加となりました。

このところ、オリジナルの『宇宙工学的生命維持装置』をお読みいただいているようで、どうせなら「火星に木を植える男」に誘導したいなあと、リメイク版でもありプロローグである『スキヤンダル』を投稿しました。

オリジナルの『宇宙工学的生命維持装置』と、プロローグである『スキヤンダル』の本編『火星に木を植える男』を併せて読んでいただけたら、作者冥利に尽きますです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0831v/>

宇宙工学的生命維持装置 version「スキャンダル」

2011年7月22日03時36分発行